

道元禪師における“時”の一考察

務 台 孝 尚

はじめに

道元禪師の時間論については、先学のあらゆる角度からの論究がなされ、今さらながら驚嘆せずにはいられない。これもひとえに、道元禪師の時、時間に対する重要性、またその必然性というものが窺われるのである。そこで、ここでは道元禪師がどのように“時”を捉えているのか、筆者なりの試論を述べてみたい。

さて、道元禪師の時の説示、時間論というべきものは、特に「有時」の巻とされ『正法眼蔵』の一巻として納められている。しかしながら、禪師の時に關しての説示は、既に「現成公案」の巻においてその規定がなされている。この中で、“時”という言葉は使用されているのではないが。すなわち、

人、舟にのりてゆくに、めをめぐらして岸を見れば、きしのうつ

るとあやまる、目をしたしく舟につくれば、ふねのすすむをしるがごとく、身心を亂想して万法を辦旨するには、自心自性は常住なるかとあやまる。もし行季をしたしくして箇裏に歸すれば、万法のわれにあらぬ道理あきらけし。

たき木はひとなる、さらにかへりてたき木となるべきにあらず。しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して、さきありのちあり、前後ありといへども、前後際断せり。灰は灰の法位にありて、のちありさきあり。かのたき木、はひとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になるといはざるは、仏法のさだまれるならひなり、このゆゑに不生といふ。死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転なり、このゆゑに不滅といふ。生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり。たとへば冬と春のごとし。冬の春となるとおもはず、春の夏となるといはぬなり。

（『現成公案』『全集』上八頁）

である。いわゆる、舟と岸、そして自己との關係において、また薪と灰との關係について“時”が譬喩をもって説かれて

いる。これを、生と死、春・夏・冬によってでもある。そして、この「現成公案」の中で説かれている「時」を具体的に説示されたのが「有時」の巻に他ならない。それにつけても、「有時」の巻としてこれ程までに「時」時間を意識し説示しなければならなかった道元禪師の思惑、その意図はどのようなものであったのであろうか。この事に関しては、既に多くの先学の方々より指摘がなされているが、それは道元禪師が八才のとき、慈母の死に邂逅したことに依る。慈母の死を体験することによって、禪師は生死、特に「人間は必ず死ぬのである」ということを意識せずには居られなかったのではないだろうか。そして、このとき無常を感じたと言ってもよいであろう。死に対して疑問を投げかけたとき、そこから自ずと生が意識され、人間あるいは自己の存在自身が問題となってくる。そして、「自己とは何か」、「自己存在とは何か」、ここに自己が問題となるとき、生死が問われて来る。とはいえ、「有時」の巻では、一般の人々の見解を次の様に説かれている。

十二時の長遠短促、いまだ度量せずといへども、これを十二時といふ。去来の方跡あきらかなるによりて、人これを疑著せず。疑著せざれども、しれるにあらず。（「有時」『全集』上一八九頁）

つまり、人間が暮らしている時間は二十四時間であり、いちいちそれを量っているのではないが、それが十二時なのであ

道元禪師における「時」の一考察（務 台）

る。そして、事象の移りゆく方向、形跡ははっきりしている為、人はそれを疑ってもみないし、またはっきりわかっているから疑わないというのでもないのである。あるいはまた、「仏性」の巻の中では、

仏言、欲知_レ仏性義、当_レ觀_レ時節因縁。時節若至、仏性現前。

（「仏性」『全集』上十六頁）

と、仏の言われることを外道の輩は、

時節若至の道を、古今のやから往々におもはく、仏性の現前する時節の向後にあらんずるをまつなりとおもへり。

（「仏性」『全集』上十六頁）

とか、

時節いたらざれば、參師問法するにも、辨道功夫するにも、現前せずといふ。

（「仏性」『全集』上十六頁）

と、いう具合に捉えるのである。しかし、自己が問題となるとき、そこには自ずと「時」、時間との関係が浮び上がってくる。というのも、自分自身は現に存在しているからである。道元禪師は、このことを切々と「有時」の巻をはじめその他の巻の中で説示されているのである。

そこで、「時」とはいったい何なのか、「有時」の巻では、これを

いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。

〔有時〕『全集』上一八九頁

と、述べられている。即ち、時が有であり有が時なのである。この時を除いては何も語り得ないし、何もそこには存在はない。死はただ虚無なるのみであり、時があるからこそ、生があり自己があるのである。だから、「時すでにこれ有り、有はみな時なり」といい尽くされているのである。そしてこれを展開して、「われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭頭物を時時なりと覷見すべし」であり、「われを排列してわれこれを見るなり。自己の時なる道理、それかくのごとし」、また、「有時みな尽時なり、有草有象ともに時なり、時時の時に尽有尽界あるなり」と時の状態を説かれている。さらには、具体的に山登り、河を渡ることを自己との関係において、

山河とわれと、天と地となりとおもふ。しかあれども、道理この一条のみにあらず。いはゆる、山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず。時もし去來の相にあらずば、上山の時は有時の而今なり。時もし去來の相を保任せば、われに有時の而今ある、これ有時なり。

〔有時〕『全集』上一九〇頁

と説かれ、時と時、時とわれ（自己）とが一体となっていることがいわれ、いわゆる「有時の而今」ということが説かれるのである。よく世に知られるところのデカルトの「我れ思

う、ゆえにわれあり」という把握の「時あるがゆえにわれあり」では決してないのである。であるから、

尽界にあらずる尽有は、つらなりながら時時なり。有時なるによりて吾有時なり。

〔有時〕『全集』上一九二頁

と、道元禪師はいわれるのであって、時とわれのあり方を吾有時と捉えるのである。そして、この吾有時なる有時には過現末の三世の経歴があることを説かれる。すなわち、

有時に経歴の功德あり。いはゆる、今日より明日へ経歴す、今日より昨日に経歴す、昨日より今日へ経歴す、今日より今日に経歴す、明日より明日に経歴す……中略……経歴といふは、風雨の東西するがごとく学しきたるべからず。尽界は不動転なるにあらず、不進退なるにあらず、経歴なり。経歴は、たとへば春のごとし。春に許多般の様子あり、これを経歴といふ。外物なきに経歴すると参学すると参学すべし。

〔有時〕『全集』上一九二—一九三頁

であり、いわゆる時の具現化を経歴ということにおいて説かれているのである。これは、先にも述べたところの「現成公案」の巻の趣旨と全く同じであることは言を待たない。

一方また、無常ということに関係していえば、一般的には「ものは移り行く、生じているものは滅する」という解釈がされ、事象は変化しこの変化を繰り返しながら刹那生滅していると見做されている。しかし、道元禪師にあっては、以上

のように、時とわれとが一体として経歴すると説かれるのである。いふなれば、禪師は時それ自体が無常であるとされるのであり、ものは移りゆくというような現象を指しての論理ではない。換言するならば、本体の論理ともいふべきものである。

したがって、このようなところより道元禪師はこの時を必要以上に重要視し、これを行へと転換させてゆくのである。その事が『正法眼藏随聞記』に端的かつ克明に説示されている。すなわち、

示云、無常迅速也、生死事大也、暫存命ノ間、業ヲ修シ、学ヲ好ニハ、只仏道ヲ行ジ、仏法ヲ学スベキ也。

（『正法眼藏随聞記』卷二『全集』下四三三頁）
であり、あるいは、

念念ニ不留、日日ニ遷流シテ、無常迅速ナルコト、眼前ノ道理也、
（『正法眼藏随聞記』卷三『全集』下四四一頁）

である。それに、『正法眼藏』「行持」の巻では、

いまといふ道は、行持よりさきにあるにはあらず、行持現成するをいまといふ

（「行持」『全集』上二二三頁）
と説かれており、時と行、時から行への転換がはっきりと理解できるのではないだろうか。

おわりに

紙面の都合上、非常に資料不足で、ざっぱく論理展開となつてしまつたが、時の重要性を道元禪師が絶えず説き続けていることは『随聞記』の中において至る所に窺えるのであり、「吾我ヲ離ルルニハ、観無常是レ第一ノ用心也」と述べられているが如く、自己との関係において常に捉えられているのである。また、「我初メテマサニ無常ニヨリテ聊カ道心ヲ発シ」とあるように、無常、時を行へと転換させ、それを只管打坐とした所に道元禪師の時に對する独自性が生まれているのではないだろうか。時を行へと転換したその行、つまり修証論ともいふべきものは、機会を新たに時の補足を加えて述べてみたい。

（詳註略）
△キーワード▽ 時（とき）、有時、自己、行

（曹洞宗宗学研究所所員）